

その「物語」の物語。

“ペログリ”的複眼思考の味わい vol.120

田中 康夫



たなかやすお ● '56年東京生まれ、作家。'00年より長野県知事を2期務める。'07年に参議院議員に当選。'09年に衆議院議員に当選。1期務める。『文藝』(河出書房新社)2013年冬季号から17年ぶりに小説の連載を開始。【公式ブログ】<http://www.nippon-dream.com/>



「富国裕民」の心智を戴き、戦後日本を疾走した2人の“思想家”

今週の逸品



自家製シャルキュトリーのシュークルート 2400円

地下鉄南北線が影も形もなく、プラチナストリートなる呼称も存在しなかった1980年代に6年暮らした僕にとっては隔世の感な白金台で今猶営業するガソリンスタンド脇の路地で営まれるルカンケは、ビストロ的料理をプラチナ風に昇華させたブータンノワールと半熟卵のブリック焼き青リンゴソース1400円を始め適度な作品が品書きに並ぶ。午餐は2600円〜。パンと共に供されるタップナードとリエットも美味。

【ルカンケ】東京都港区白金台5-17-11 ☎03-5422-8099 営11:30~15:00(LO13:30)、18:00~23:00(LO21:30) 月曜定休(祝日の場合翌火曜) 禁煙 <http://requirer.jp/>

illustration by Hajime Anzai



「私には資本主義社会、自由主義経済をより良く正すトロッキストとしての役割が課せられているのかも知れませんね。」
堤清二氏は嘗て、こうした趣旨の発言を僕に吐きました。自身ともし詩人で百貨店店主が主人公の小説「いつも同じ春」を上梓された1983年頃の記憶です。
文芸評論家でもあったユダヤ系のレフ・トロツキーは、資本主義とスターリン主義の専横振りを正すべく第四インターナショナルを結成するも亡命先のメキシコで、

ヨシフ・スターリンが送り込んだ刺客に暗殺されます。
行政に留まらず企業・団体・組合等の組織に巣くう官僚主義と既得権益の保持・増殖の自己目的化が専制政治の世の中を生み出します。斯くなる迷走・暴走を食い止める、軌道修正する体制内変革こそ、今に至るも評価が定着せぬトロッキズムの深意なのでしょう。
「最近では流通業界も話題がM&A(合併・買収)ばかりだもね。何でも金に置き換えていくのはどうなんだろう」と語った彼は、「消費

者の低価格志向に対応し、スケールメリットを追求する多くの流通企業」の流れに産業としての行き詰まりを懸念していた」と「日本経済新聞」は記しました。
「資本の論理だけに換算されない」、人間の存在価値を掘り下げて、新たな商品・サービスの提供すべき」流通産業は「世の中の流れと違うことを考えないとだめ」と堤氏が、中内功氏と「なんかやろうと話したこともあった」逸話も「評伝」で披露しています。
「時代と共に変わる『よい品』を、

だれでも、いつでも、どこでも、欲しい量だけ買える仕組みを作る」との信念で「主婦の店・ダイエー」を創設した中内氏の聲にも幾度となく接した自分の記憶を、僕は手繰り寄せました。
1981年に関西財界セミナーで日向方齊・住友金属工業会長が徴兵制導入を含む「防衛拡張論」を開陳した際、「異議あり」と声を上げ、太平洋戦争は資源の争奪によって起こった。貴方の会社は軍需産業として儲かるでしょうが、我々は堪ったものじゃない」と噛み付いたのは、並み居る出席者の中で58歳の中内氏ただ一人でした。「人々の日々の暮らしが姿を消し、『お国のために』が前面に出て来たとき、戦争が始まった。流通が消え、配給が登場した」と生前に述べ懐いた中内氏は、セゾングループを率いた堤氏とは鑄を削る「好敵手」の間柄でした。
が、「武器と麻薬と売春だけは決して扱わない」と事ある毎に発言していた堤氏も、そして中内氏も富国強兵ならぬ富国裕民の心智を共に戴き、戦後日本を疾走した「思想家」だったと僕は捉えます。
1981年にハウディ西武として誕生し、セゾングループ傘下でシェルガーデン改めザガーデンとして営業してきたスーパーマーケットも今夏に目黒通り沿いから姿を消した、白金台の一廓に位置する「ルカンケ」で僕は追想しました。